

2022/8/8

## イメージ・メイキングを分解する

Reinventing Image-Making

2022年8月9日(火) - 2022年10月10日(月・祝)



タマシュ・ヴァリツキー  
《二眼レフカメラ》〈想像のカメラ〉より  
2017/2018年 コンピュータ・グラフィック  
作家蔵

絵画、写真、映画、テレビ等の視覚表現や、脳内で見える夢や言葉にならない曖昧な印象、そして目に見えるものから心の中に浮かんだことまでを、イメージという語で指し示すことができます。このようなイメージに形を与えることを、本展では「イメージ・メイキング (image-making)」と呼びます。

科学的探究心と技術の発展により、光学を利用したイメージ・メイキングが飛躍的に進化したことで、人間の視覚を正確に再現するだけでなく、本来肉眼では見ることはできないイメージまで作り出すことが可能になりました。このことは、多くの芸術家たちに刺激を与え、視覚的表現の可能性を上げた一方で、技術的なルールを課すことにもなりました。

本展では、東京都写真美術館の収蔵資料であるイメージ・メイキングのための装置の展覧を通して、その一様ではない技術や原理を紹介するとともに、イメージ・メイキングの技術の仕組みや道具に注目し、分解したり要素を組み替えたりしながら、標準化されたイメージへの批評を加えて、イメージ・メイキングを新たなものとして再発明してきた作家たちの作品を紹介します。

イメージには実体があるわけではありません。イメージは、作家が制作した作品やコンピュータや映像装置から出力された場所を支持体にして、その形を変えながら広く伝わっていきます。そして、視覚を通じて外的なイメージを認識するだけでなく、想像力によって内的にイメージする私たちも、イメージの担い手なのです。

## みどころ

### 1 光学技術を超えた、イメージ・メイキングの可能性

いま私たちは、スマートフォンやアクションカメラなどの進化したデジタルカメラの技術を活用することで、写真・動画イメージを手軽につくり出すことができます。これらは光を集束・発散させて像をつくる光学の原理を利用したカメラ技術の飛躍的な進歩によるものです。一方で、光学技術を介して生成されたイメージがオンラインを中心に大量に溢れ、飽和状態にあるともいえます。本展は、写真・動画といったカテゴリーを取り払い、古今の光学技術を超えた先にあるイメージ・メイキングの例に注目します。イメージをつくるための既存の枠組みを分解し、その本質に迫る作家たちの実験的な試みは、私たちに新たな視座を与えてくれることでしょう。

### 2 コンピュータ、数学、レンズのない世界で再発明されたイメージ

本展では、イメージを作り出す既存の形式を問い直し、新たなイメージ・メイキングに挑み続ける作家たちを紹介します。

ーコンピュータが織りなすイメージ Art Ex Machina (アート・エクス・マキナ)

1960~70年代のコンピュータ・アートの黎明期に新たな芸術や表現を求めて、当時は主に事務・科学計算に使用されていた巨大なメインフレーム・コンピュータなどを使用して制作された先駆者たちの意欲的な作品を展示します。

ー数学が紡ぎ出す詩 木本圭子

「数学は、合理的なだけではなく詩的でもある」と話す木本圭子の作品は、数理アルゴリズムという抽象的なシステムを用いて制作されるにもかかわらず、生き物のようでもあり、柔らかさと美しさを持ちます。本展では、平面、立体、映像の作品とあわせ、作家の制作過程に触れることができる制作ノートも展示いたします。

ーレンズレスの世界 藤幡正樹

《ルスカの部屋》で藤幡が作りだしたのは「レンズの無いカメラ」です。基本的な原理は、対象物にレーザーをあててスキャンすることで像を作る走査型電子顕微鏡と同じで、来館者は展示室内で実際にレーザーが照射され、像が作られていく過程を体験できます。2004年に制作された《ルスカの部屋》ですが、本展ではスキャンする対象物も新たに、再制作された本作をご覧いただける貴重な機会となります。映像は真実を映しているのか、レンズを通したイメージを見慣れている私たちに問いかけます。

ーこんなカメラがあったなら タマシュ・ヴァリツキー

〈想像のカメラ〉は、コンピュータ・グラフィックス、コンピュータ・アニメーションを用いて想像上の映像機器をデザインした作品のシリーズです。テクノロジーに造詣の深い作家ならではの技術面での創造性に加え、作家自身の幼少期の記憶が投影された詩的な美しさにもご注目ください。

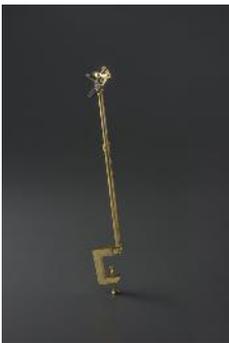
### 3 国際的に注目されるタマシュ・ヴァリツキーの最新シリーズを国内初出品

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ(2019年、ハンガリー館)の出品作家タマシュ・ヴァリツキーの、同展出品作品である最新シリーズ〈想像のカメラ〉(2016年~)を国内初出品します。このほか、初期のコンピュータ・アニメーション《ザ・ガーデン》(1992/1996年)や〈機械たち〉(1989年)など、国際的に注目される作家のこれまでの代表作をまとめてご覧いただける貴重な機会です。

## 展覧会構成

### 1 映像装置：多種多様なイメージ・メイキングの装置

人間はこれまで多種多様なイメージ・メイキングを試みてきました。ここでは、その痕跡であるさまざまな映像装置とその原理を紹介します。光学的なイメージ・メイキングの道具である「カメラ・ルシーダ」、動いていないものが動いて見える錯覚を利用した「ゾートロープ」、20世紀初めに制作された35ミリフィルム映写機などを展示します。



左上から：  
キノーラ(レンズつき、イギリス製)、  
ゾートロープ、  
カメラ・ルシーダ、  
35 mmフィルムプロジェクター兼マジックランタン  
すべて東京都写真美術館蔵

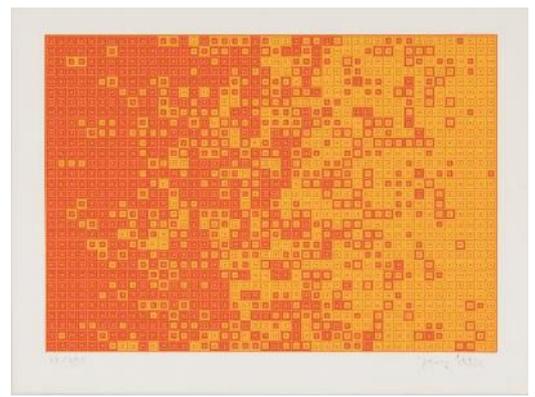
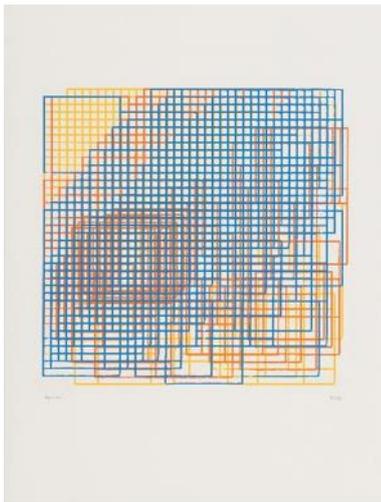
### 2 アート・エクス・マキナ：コンピュータによる「美」の分解

〈Art Ex Machina〉(アート・エクス・マキナ)は、ジル・ゲールブランドによって1972年にモントリオール(カナダ)で出版された版画のポートフォリオです。6名の作家が生み出したこれらの版画の原画は、コンピュータによって描かれました。作家の入力したプログラムに沿って、ある程度自動的に描画される作品は、今日のジェネラティブ・アートの先駆けとも言えるでしょう。

作家のうち、ゲオルク・ネース、フリーダー・ナーケ、川野洋らは、哲学者・美学者であるマックス・ベンゼが築いた研究領域「情報美学」の影響を受けていました。彼らは、単に新奇なイメージを作るためにコンピュータを使うのではなく、コンピュータは、人がいかに「芸術」を創作できるかを分析することができ、また生成することのできる道具であると考えました。

#### 出品作品：〈Art Ex Machina〉1972年 シルクスクリーン

参加作家はゲオルク・ネース、ケネス・ノウルトン、川野洋、マンフレッド・モール、フリーダー・ナーケ、マニュエル・バルバディージョ。現在のようなパーソナル・コンピュータが無かった1970年代当時、主に事務計算・科学技術計算で利用されていた大型機であるメインフレーム・コンピュータや工業用の作図機などをプログラミングして制作されたものです。



左から フリーダー・ナーケ《無題（ウォークスルー・ラスター）》、川野洋《無題（Red Tree）》、ゲオルク・ネース《無題》、すべて〈Art Ex Machina〉より  
1972年 シルクスリーン 個人蔵 Copyright Gilles Gheerbrant 1972/2022

### 3 木本圭子：描出の身体とアルゴリズム

木本圭子は「描くこと」の起源である点の位置とその移動を、紙の上に手で描くのではなく、プログラミングによって決定することに強い興味を抱いて実践した作家です。絵を描くことが好きで美術大学で学んだ木本にとって、卒業数年後に市販されたパーソナル・コンピュータは衝撃的でした。緊張しながら手を動かし、いかに気持ちの良い描線を描けるか。演算によって自動的に、いとも簡単に美しい線や絵を描けるコンピュータの存在は、木本にとってこういった描画の行為の前提であった身体感覚を揺るがすものでした。以降の作品で木本は、コンピュータの背景にある数理アルゴリズムの中に、いかに身体感覚を見出すか、という問題に取り組んできました。

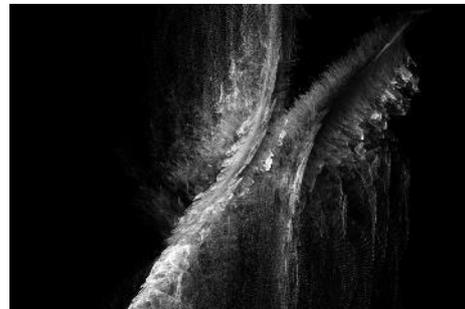
出品作品：〈Imaginary・Numbers〉（2012年、静止画）、〈velvet order〉（2015年 静止画）、《INSIDE》（2009年 シングルチャンネル・ビデオ）ほか

今回出品される作品は、シリーズ〈Imaginary・Numbers〉〈velvet order〉の静止画と、動画作品《INSIDE》です。また、これらの作品に加え、〈Imaginary・Numbers〉の構造を示した「立体グラフ」「平面グラフ」、「アトラクタ・グラス」を展示します。さらに「制作ノート」は、作品制作の過程で作られた習作、いわば試行錯誤の痕跡といえるでしょう。

1



2



3

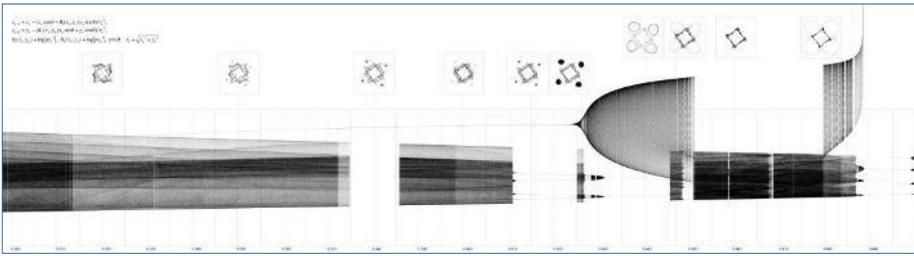


木本圭子

1 《Imaginary・Numbers》2012年 印画紙出力 作家蔵

2 《INSIDE》2009年 シングルチャンネル・ビデオ 東京都写真美術館蔵

3 《Imaginary・Numbers》モデルBの分岐図（2パラメタ）2006年 アクリル 作家蔵



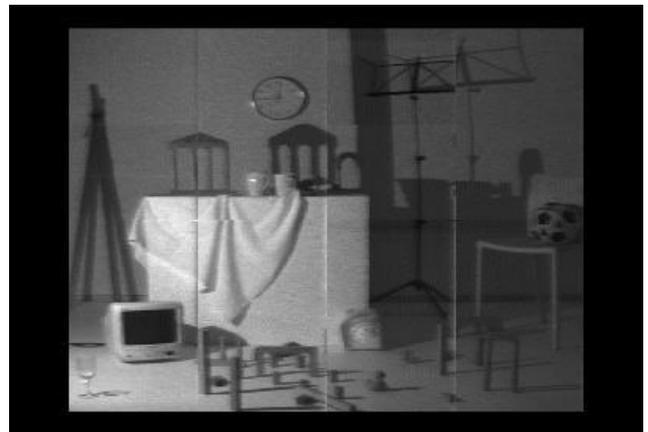
木本圭子《Imaginary Numbers》モデル B の分岐図 2012 年 フィルム出力 作家蔵

#### 4 藤幡正樹：非・光学のイメージ生成

写真術とは光学と化学のハイブリッドといえますが、顕微鏡や望遠鏡をはじめとするレンズは純粋に光学的な装置です。これらはいずれも近代以降、人間の視覚認知に影響を与えてきました。一方、本作《ルスカの部屋》は「走査型電子顕微鏡」の原理 [図 3] を応用しており、藤幡は「レンズの無いカメラ」と呼んでいます。本作《ルスカの部屋》が作り出すイメージは、光学的に作り出されたイメージとは異なり、まるで現実の奇妙な似姿のようです。

出品作品：《ルスカの部屋》2004/2022 年 インスタレーション

この作品では、走査型電子顕微鏡と同じく、対象にレーザービームを当ててスキャニング（走査）し、その反射光の量と生成される画像のピクセルの位置を同期させることで、画像が生成されています。出力されたイメージの中にある影やモニターディスプレイに注目すると、レーザーの光源ではなくセンサーの位置によって、影の形が決まっていることがわかります。発光するモニターに表示されているイメージが画面走査では映し出されないのも、この「レンズの無いカメラ」の特徴です。



藤幡正樹《ルスカの部屋》2004/2022 年 インスタレーション [参考図版] 東京都写真美術館蔵

#### 5 タマシュ・ヴァリツキー：あり得たかもしれないイメージ・メイキング

タマシュ・ヴァリツキーは、カメラ好きの父親の影響で映像機器に囲まれて育ち、また若いころから仕事を通じてコンピュータに親しんでいました。そのような経歴を持つ作家はこれまでの作品で、既存のイメージングの技術や原理を分解し、新しいものに作り替えてきました。彼の作品は「我々は道具を通してどう世界を見ているのか？」ということ問いかけてくるようです。

出品作品：《ザ・ガーデン(21世紀のアマチュア映画)》1992年 シングルチャンネルビデオ

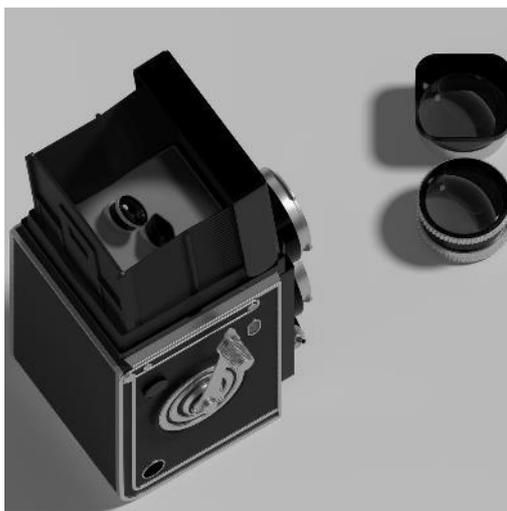
ヴァリツキーの初期の代表的なコンピュータ・アニメーション。もともとは作家自身の娘である幼児を撮影した8mmフィルムでしたが、この映像では、自由に動き回る女の子の動きや興味に応じて視野が歪んでいきます。ルネサンス以降、標準的視覚モデルであった「見る主体」が中心にある「一点透視図法」に対し、「写っている主体」の動きに応じて変形する、作家考案の「水滴遠近法」を適用しています。



タマシュ・ヴァリツキー 《ザ・ガーデン(21世紀におけるアマチュア映画)》1992年 シングルチャンネル・ビデオ 作家蔵

### 〈想像のカメラ〉2016-2019年 コンピュータ・グラフィック

コンピュータ・グラフィックス、コンピュータ・アニメーションを用いた最新シリーズで、19世紀に開花した数々の視覚・光学装置をベースに構想されました。「あり得たかもしれない」想像上の映像機器をデザインし、提示します。

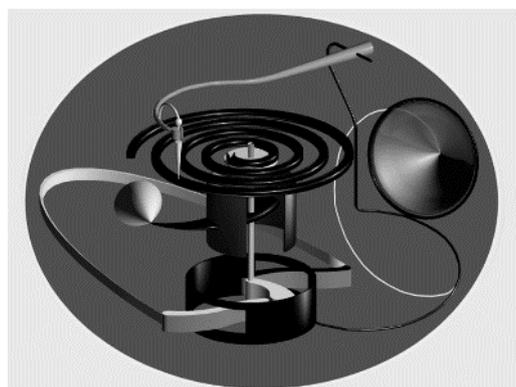


タマシュ・ヴァリツキー

左から《ボートロープ・カメラ》、《二眼レフ・カメラ》〈想像のカメラ〉より 2017/2018年 コンピュータ・グラフィック 作家蔵

### 〈機械たち〉1989年

このコンピュータ・グラフィックスのシリーズでは、作家自身の生活を取り囲む、車、グラモフォン、ミシン、という機械たちの動作原理が露わになっています。昔のバーレスク映画に登場する、ユーモラスで擬人化された機械からインスピレーションを得て、白黒の画面になっています。



タマシュ・ヴァリツキー 《グラモフォン》〈機械たち〉より 1989年 コンピュータ・グラフィック 作家蔵

出品点数 69 点

## 関連イベント

作家とゲストによるトーク

日時 | 2022 年 8 月 11 日(木・祝) 18:00~19:30

登壇者 | タマシュ・ヴァリツキー (本展出品作家)、白井雅人 (上武大学教授)

会場 | 東京都写真美術館 1F ホール

定員 | 190 名

登壇者プロフィール

タマシュ・ヴァリツキー |

ニューメディア・アーティスト。1959 年ハンガリー、ブダペスト生まれ。9 歳で初めてアニメーションを創作。その後、画家、イラストレーター、写真家として活動し、1983 年からコンピュータを使った制作を開始。1989 年、アルス・エレクトロニカ (オーストリア) で“コンピュータ界のオスカー”と称されるゴールデン・ニカ大賞を受賞。2019 年の第 58 回ヴェネツィア・ビエンナーレにてハンガリー代表に選出された。

白井雅人 |

上武大学教授。NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] 学芸員、山形県立米沢女子短期大学、成安造形大学勤務を経て現職。専門は芸術表現論、メディアアート。著書に『メディアアートの教科書』(フィルムアート社、2008 年 共編著) など。1996 年タマシュ・ヴァリツキー「トリロジー」展 (NTT/ICC ギャラリー) を手掛ける。

## 展覧会図録

「イメージ・メイキングを分解する」

B4 判変型、166 頁 / 2,900 円(税込) / 東京都写真美術館発行

作家ステートメント (木本圭子、藤幡正樹、タマシュ・ヴァリツキー)、作家インタビュー (タマシュ・ヴァリツキー)、多田かおり (当館学芸員) によるテキストほか出品作品図版を掲載。

## 開催概要

展覧会名[和] イメージ・メイキングを分解する

展覧会名[英] Reinventing Image-Making

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、日本経済新聞社

助成 公益財団法人吉野石膏美術振興財団

会期 2022 年 8 月 9 日(火) - 2022 年 10 月 10 日(月・祝)

会場 東京都写真美術館 B1F 展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電 話 03-3280-0099 [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

開館時間 10:00-18:00 (木・金は 20:00 まで) 入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

観覧料 一般 700 円／大学・専門学校生 560 円／中高生・65 歳以上 350 円

※小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2 名まで)は無料。

※オンラインによる日時指定予約推奨

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

\*図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

\*図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

**東京都写真美術館** 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

展覧会担当 多田

広報担当 池田 / 平澤 / 鈴木 [press-info@topmuseum.jp](mailto:press-info@topmuseum.jp)

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。